

図書館通信 — 71 —

1985. 3

ネブラスカ大学オマハ校の日本語コース

山内 一 芳

姉妹校のネブラスカ大学オマハ校 (U. N. O.) では、昨年夏、日本語の集中コースが、開講されました。私は、講師の一人として、はじめ、アメリカの学生に、日本語を教える機会をもちましたので、そのときの印象と、U. N. O. 図書館の日本語教材の様子について、述べてみたいと思います。

この日本語集中コース (Japanese 205) は、6月11日から8月3日まで、八週間にわたって、Peter Kiewit Conference Center で行われました。朝8時から夕方4時まで、毎日6時間半、16単位という文字通り intensive に、ふさわしいコースでした。これまで、U. N. O. には、3単位の日本語コース (Practical Japanese Conversation 101, 102) しかありませんでしたから、今回、はじめて、外国語必修科目として、正式に認定されたこの16単位のコースは、U. N. O. の日本語教育を考える上で、たいへん意味のあるものであったと思います。講師は、静岡市出身で、U. N. O. の日本語教育の中心となっている海野恵美子さん、永平寺で十年余り修業を積んだという Victoria Brian 氏と、そして、私の三人があたりました。学生は、15名、停年近かの教授 Harry、お孫さんもいる Carol、二児の母 Susan、言語学の Mark、ドイツ語の Randy、国際学科の Joan、Beverly、Maurice、Patrick、Tom など、それに、今、静岡大学に留学中の Jennifer が、聴講生として、参加していました。私にとっては、皆、忘れることのできない学生たちです。しかし、残念ながら、この中で、最後まで残ったのは、約半数の8名にすぎませんでした。もちろん、その最大の理由は、たいへんハードなコースであったからなのですが、日本の大学の事情とは、違う点がありますので、多少、説明を要します。途中でやめた学生には、辞退した時点に応じて、授業料 (約15万円!) が、その割合で返される仕組みになっています。そして、試験を何回か受けて、よい成績 (たとえば、Aは

90%以上) がとれないとわかると、損を承知で (場合によっては、授業料が、まったく戻ってこない)、自主的に、おりの学生がいます。16単位分も、C (Cでも75-70%) をつけられては、たまらないというわけです。では、どのくらいハードなコースであったのか、少し、紹介してみましょう。テキストは、主に、John Young、Kimiko Nakajima の *Learn Japanese: College Text, Vol. 1-Vol. 4*. Honolulu, The Univ. Press of Hawaii, 1978. (A4判、約1,000ページ) を使いましたが (この他に、Everett F. Bleiler; *Basic Japanese Grammar*, Chie Nakane; *Japanese Society* と、*Japanese Kana Workbook Nihongo no Kiso*)、一日に進むスピードは、1.5課、約25ページ、毎日、宿題があり、毎週、金曜日には、試験があります。語学のコースですから、例文 (Presentation, Dialogue) は、暗唱しなければなりませんし、文法や用語の説明 (Notes) のあとの演習 (Drills)

も く じ

ネブラスカ大学オマハ校の日本語コース… 1	
〈参考図書の紹介と使い方〉	
大漠和疑いながら引いてみる……………	3
教職員著作寄贈図書……………	4
〈私と図書館〉	
研究と図書館……………	5
図書館繁盛記 in U. S. A. ……………	5
私の図書館利用……………	6
お知らせ……………	6



◎新入生のための図書館利用案内のお知らせ
は次ページに

は、前もって、用意しておかなければなりません。この他に、テープが10本用意されました。こういう具合ですから、予習、復習を怠ると、たちまち、立ち往生、一日休めば、取り返すのがたいへんで、ついていけなくなる状況におちいります。学生たちは、実に、よく勉強しました。とくに、金曜日の試験となると、真剣そのもので、できなかったときのくやしがりようは、ちょっと、日本の大学では、想像できないものです。口は、きかなくなり、涙さえ浮かべる学生がいるのですから、とても、声などかけてやる雰囲気ではありません。このように必死にがんばるかれらの努力と真剣さには、心うたれるものがありました。ともかく、こうして、8月3日、無事、日本語集中コースは、終了しましたが、この最後のときに、私は、たいへん印象的な言葉を、学生たちから学びました。それは、“Bitter and sweet”です。Carolが、最初、“Bitter and sweet”と言い、それから、SusanとMarkが、“Bitter and sweet”と、くり返しました。このとき、はじめて、私は、かれらとともに、「苦楽をともにしたのだ」という実感をあらたにしたように思います。

さて、U. N. O. の図書館には、このような熱心な学生たちにこたえる日本語の教材が用意されているかという、残念ながら、数える程しかないのが実状です。日本関係の図書でも、歴史、文化

の分野は、英文の文献が、割合、用意されているのですが、日本語の文学全集、歴史の資料などは、私のみる限り、ほとんどありませんでした。日本語学科がないのですから、やむを得ないかもしれませんが、日本語に関心を持ち、学ぶ学生のためには、基本的な教材が、もっと用意されていたらと思います。私は、オマハを去る前、集中コースのために用意したビデオ、スライド、パネル、テープ、テキストなどを Library-Reference Dept. (参考調査科) の Bohn さんに託してきました。近く、国際交流基金によって、日本語の教材が購入されるときいていますから、この事情は、かなり改善されるでしょう。ここで私の希望を述べさせていただくとすれば、姉妹校である静岡大学と U. N. O. は、留学生、研究者の交流だけでなく、静岡大学からは、日本関係の文献が、そして、U. N. O. からは、アメリカ関係の文献が、というように、図書館相互の交流も、現実のものとなるようになればと、私は、心ひそかに期待しています。

最後に、U. N. O. の日本語集中コースのために協力いただいた教育学部で日本語コースを担当されている望月通子先生、国立国語研究所の日向茂男氏、U. N. O. 短期留学の折、日本語のお手伝いを、快く、ひきうけてくれた静大の学生諸君に、お礼申し上げます。(人文学部・英語学)

新入生のための図書館利用案内のお知らせ

ライブラリー・オリエンテーション

Library Orientation

期 間： 4月15日(月)～4月19日(金)

第1部： 図書館および資料の案内と利用法の説明（ビデオによる繰り返し放映）

時 間： 午前10:00～午後4:00（除く12:00～13:00）

所要時間： 1回15分

場 所： 喫煙コーナー（4階閲覧室入口右側）

第2部： 書庫内案内

時 間： 第1回 午後1:30～ 第2回 午後3:30～

所要時間： 毎回15～20分

集合場所： 喫煙コーナー（4階閲覧室入口右側）

〈参考図書で紹介と使い方・②〉

大漢和疑いながら引いてみる

落合守和

《大漢和》¹⁾は漢字字典・漢語辞典である。漢字で書かれた語彙を集める。漢語はいわゆるシナ語・中国語のことだから、漢和は英和や仏和と同じく外国語辞典の一種である(はずだ)。ところが、この外国語辞典は、漢語来源の日本語語彙も収めるから、その点では、日本語辞典(国語辞典)の性格も持っている。しかも、外国語で引くことのできない外国語辞典であること、他の多くの漢和辞典と変わらない。

《大漢和辞典》全12巻。収録する漢字は48,902(補遺を含めれば49,964)を数え、語彙項目は50万を超すといわれる。4段組みで本文13,757頁。1巻がやっと片手でつかめる厚さだから、全巻を並べると普通の書架の1段には収まりきらない。《康熙字典》に倣った部首画引きの漢字辞典である。本文とは別に索引1巻があり、漢字をその画・音・訓・四角号碼²⁾によっても検索することができる。これだけの情報量をもつ漢語の辞書は、今のところ、中国・台湾にもない。

著者、諸橋轍次。1883—1982年。この辞書の編輯は、文字どおり著者畢生の事業といつてよい。大正末年にカードとりの作業を始めてから、昭和30—35年に写植版の初版を発行するまでに、30年以上の年月を費している。戦時中いったんは第1巻の刊行(1943)を果たしながら、全巻の活字組置き原版を戦災で焼失、また著者自身激務のため右眼の光を失うに至る。この間の事情は、著者の対談録³⁾にくわしい。また、この辞書の出版者として著者を支えた大修館・鈴木一平の記す〈出版後記〉(索引巻末)も一読に値する。本来ならば、一出版社の仕事としてよくなし得るところではなかったかも知れない。

漢語の使い手たちは、漢語をあらわす文字、漢字のはたらきを形・音・義の三つの側面からとらえてきた。漢語の辞書の歴史にも三つの流れがみられる。1) 形すなわち漢字の字体を扱う字書(説文解字—康熙字典)、2) 音すなわち漢字の音声を記述する韻書(切韻—広韻)、3) 義すなわち漢字の意味をとらえる訓詁の字書(爾雅—經籍纂詁)。ひとつの辞書が単一の性格をもつというよりも、漢字を、字体・音声・意味のいずれによってグループ分けするかという排列方法の違いととらえた方が事実に近い。このほかに、あることがらを意味

する語彙を通時的に並べる類書(通典—太平御覽)という独特の分野がある。日本で戦時中から使われてきた田中慶太郎・松枝茂夫の《支那文を読む為の漢字典》(1940)や、現在中国で広く使われる《新華字典》(1971修訂)は、小冊ながら字書・韻書・訓詁の三つの面を備える。これに加えて、諸橋《大漢和》は、書名・人名・地名・官名その他の事項も載せるので、ことがらの事典・類書としての性格もあわせ持つ。

ためしに、基礎語彙から一例、漢字「人」を引いてみる。人部0画。第1巻556頁から20頁にわたって、この文字およびこの文字に(訓読上)始まる2字以上の語彙734項目が並ぶ。文字の形・音・義すなわち字体・音声・意味を説明すること、一般の漢和辞典と変わらないが、このほかに名乗(日本人名用の特殊な訓み、この文字ではヒトのほかサネ)というユニークな一項がある。音声は、次の4項を示す。1) 日本漢字音：漢音ジン／呉音ニン、2) 《集韻》(1066)による反切(漢字2字による音声表記)：而鄰切、3) 韻母(音節の後半部分)：真韻・平声、4) 現代共通語：シナ式表記(注音字母) ㄖㄣˊ／イギリス式ローマ字表記(ウェード式) jen²(今ならば、ピンインで rén と表記する)。さらに、「小篆」の字体を示してのち、文字の意味17項(ひと・人間、人民・住民、……姓)が、その用例とともに並ぶ。

「人」で始まる語彙は、あとに続く文字の訓みの五十音順に排列される(人痾一人衣……)。第2字が同じ場合は、さらに文字数の順による。たとえば、「人口」ならば、「人口—人口税—人口論—人口過剰—膾炙人口」のように。この例をみてもわかるように、純粹の漢語というより日本語としての漢語語彙が少なくない。「膾炙人口」は、現代漢語では、“kuàizhì rénkǒu 膾炙人口”(「膾」は繁体字では、「脍」。「会」に kuài の音あることにもとづく簡体字、例、会計)。漢語の使い手たちが好む四字成語すなわち4音節からなる慣用句。《大漢和》は、漢語としての読み方を示さず、漢文訓みで“jinkou ni kwaisya su”と訓ずる。「人口」はともかく、「膾炙」はどう読むか、どういう意味か? 2字ともにニクヅキを含むから、肉に関係する言葉だろうと思えるのは、よほどの人だろう。「膾」はこの辞書では、第9巻肉部13画。「膾炙」は、

“kwaisya/kwaiseki”と訓じ、名詞・動詞ふたとおりの意味を用例とともに示す。

以上の字体・音声・意味あるいは語彙に関するこの辞書の記述は、他の辞書に比べて特に優れているとは言えない。むしろ、この辞書の生命は、単字や語彙に附された用例の豊かさにあると言ってよい。「膾炙人口」の語では「膾炙」の項に3例、「人口」の項に2例。「膾炙」7例、「膾」7例。「人口」3例。「人」に至っては、注を含め64例。この点では、一般の漢和辞典が用例を必ずしも示さないのに比べれば有用である。しかし、ふたつの点で問題なしとしない。第一、用例はほとんど先行する辞書にみられるものばかりであって、この辞書の編輯にたずさわった人たちが独自に集めたものが少ない(上例ではゼロ)。特に、清朝康熙帝勅撰《佩文韻府》の利用が目立つ。第二、用例にはいわゆる返り点が施されているものの、日本語訳がない。第二の点は、漢和辞典の通弊。第一の点は、「語彙を採択した資料は、経史子集に互る古典を中心とし、……出典・用例は和漢の原典によって正確にこれを引用」(凡例)する原則が徹底には守られなかったことを示す。

この辞書の最大の欠点は、編輯方針が一貫しなかったことにあるだろう。当初2冊ものの漢和辞典として構想されながら、「字書よりは辞典を」との思いから、漢字語彙のすべてを採集する方向に軌道修正された。カードづくりの基礎作業を積みあげるのではなく、先行する辞書の利用に傾いていったのだろう。その意味では、よく辞書を引いたと思われる辞書ではあっても、よく原典にあたったと思われる辞書ではない。もとより容易な仕事ではない。将来は、電算機を利用して、初出(に近い)例や頻度の高い用例を集めて辞書を作る人(機関)があらわれるだろうが、それはまだ遠い夢である。

この辞書の弱点として、著者自身は、音声面の記述、白話語彙・仏教語彙・日本漢詩文にみえる語彙の少ないことをあげる。《大漢和》の簡約版《広漢和》⁵⁾では、音声面で若干の改良が試みられた。たとえば、声母(音節の前半部分)は示さないが、韻母を《広韻》(1008)で示し、現代漢語音をピンインで示すほか、漢代以前の上古音、隋唐代の中古音、元明代の近世音のそれぞれ一応の再構形を示し、さらに単字のピンインによる索引を付けるなど。現在刊行中の《修訂版》⁶⁾は、縮刷版(B5)を眼に親しみ易いA4版にしたもの。ただし、《大漢和》の修訂はむしろこれからの仕事だろう。《大漢和》・《広漢和》・《修訂版》いずれも、図書館参考室の低くて使い易い書架に置かれている。

単に漢語辞典としてばかりでなく、外国語辞典としてこれ以上大部のものは日本にはない。だが、「大」なるゆえの欠点もある。索引がわりの利用にとどめ、用例は原典にあたりたい。それでなくとも、辞書は誤り多いものだから。

(教養部・中国語)

- 1) 《大漢和》
諸橋轍次著《大漢和辞典》全13巻, 1955—60, 大修館書店
- 2) 四角号碼
漢字の字形を4ケタの数字によって示す漢字検索法。
- 3) 対談録
《大漢和辞典編纂雑話》(《漢字漢語談義》1), 《大漢和辞典》第1巻月報, 昭和30年11月(《諸橋轍次著作集》第9巻再録, pp.409—421)。
《学問の思い出》, 《東方学》第27輯, 昭和39年2月(《著作集》第10巻再録, pp.259—300)。
- 4) 原田種成・鎌田 正・米山寅太郎・田部井文雄4氏の座談会《不朽の辞書”めざす文字との闘い——諸橋轍次著『大漢和辞典』修訂版・全13巻(大修館書店)の刊行に寄せて——》(《週刊読書人》1984年3月5日号、《修訂版》月報1・2・3に再録)参照。
- 5) 《広漢和》
諸橋轍次・鎌田 正・米山寅太郎著《広漢和辞典》全4巻, 1981—82, 大修館書店
- 6) 《修訂版》
鎌田 正・米山寅太郎修訂《修訂版大漢和辞典》全13巻, 1984—(刊行中), 大修館書店

■教職員著作寄贈図書

＜本館＞

平野克明 (人文学部)

『環境科学への扉』(有斐閣双書Gシリーズ)日本環境学会編(平野克明執筆)有斐閣 1984(519.5/N77)

本多隆成 (人文学部)

『静岡県地域史研究の成果と課題』静岡県地域史研究会編(本多隆成等執筆)静岡県地域史研究会 1984(215.4/Sh94)

横井 孝 (教育学部)

『〈女の物語〉のながれ』横井孝著 加藤中道館 1984(913.3/Y76)

増田俊明 (理学部)・狩野謙一 (教育学部)

『地質構造の科学』木村敏雄編(増田俊明・狩野謙一執筆)朝倉書店 1984(455.8/Ki39)

檀原 毅 (理学部)

『地球科学講座 第5巻 測地・地球物理』檀原毅・友田好文共著 共立出版 1984(450.8/C44/5)

高橋洋二 (法経短大)

『経済認識論序説』高橋洋二著 国文社 1984(331.34/Ta33)

山本 正 (法経短大)

『数量的経済分析の基本問題』山本正著 産業統計研究会 1984(331.19/Y31)

私 と 図 書 館

研究と図書館

杉山 幸宏

私が改めて言う必要はないのだが、あえて言わせてもらえば、私達にとって附属図書館は貴重な情報源である、と言うことである。ここに来れば欲しい本や論文などはだいたい揃う。なければ他所から取り寄せてくれる。もし図書館がなく、全て自分で行くとすれば、その労力は計り知れないものになるだろう。また、附属図書館は、私達に学習の場も提供してくれる。なくてはならない存在である。

長いもので、私が静大に来てからももうすぐ6年が過ぎようとしている。最初の4年間、私が怠け者で出無精だったせいでもあるのだろうが、図書館へはあまり行かなかった。大学の講義等で課されることは手近な本等でだいたい間に合っていた（間に合わせていた）し、図書館へ行っても目的に叶う本が見つからないことがあったせいもあるだろう。ところが、大学院で自分の研究テーマに沿って研究を行う段になってから事情は一変した。研究では、どうしてもオリジナリティが要求されるため、自から通常出回っている本では事足りなくなったのである。私の研究では本よりも論文の方に頼ることが多かった。必要な論文を手に入れるために、図書館の方に顔を覚えられるくらい図書館に通ったのである（そのせいもあって、今この原稿を書いているのだが）。すると、とにかく附属図書館の必要性が実感されてきたのである。附属図書館がなかったら、私の研究は困難を極めたか、あるいは最悪の場合にはできなかったことだろう。確かに蔵書等は充分とはいき切れないけれども、これらのデメリットは、図書館のサービス機構で充分補われていると思うし、補われていなくても努力は窮える。

外国には、24時間開館している大学図書館があると聞く。この様な図書館には、寝袋を持ち込んで泊まり込む学生達もいるそうだ。日本にもあったならば、夜行性の学生達にはさぞ便利だと思うのだが、いかがであろうか。

この貴重な情報源を活かすも殺すも全て利用者しだいである。皆で大事に育てようではありませんか。（大学院・理学研究科・2年）

図書館繁盛記 in U.S.A

増田 尚子

“図書館を制する者は学生生活をも制す” —これは、私が一年間の米国留学で感じた、アメリカの学生の鉄則である。あの競争社会の大学では、図書館をいかに利用するかが、A(優)の数にかかわるのだ。「あとで、図書館でね」カフェテリアを出る学生達の残す言葉だ。ほとんどの学生は、少なくとも日に一度は図書館に行く。一日の大半をそこで過ごす学生も少なくない。利用時間は、7時から23時まで。一階の喫煙室なら、コーヒー片手に、朝の2時までねばれる。日々、予習とレポートに追われる学生達で、金曜の午後以外は満員御礼。日曜も13時前には、開店5分前のバーゲン中のデパートの入り口の如く、学生が玄関に群がる。もちろん、全員が一心不乱で強勉強しているわけではない。コーラを飲む人、冷暖房完備の自分の寝室と勘違いする人、いちやつくカップルだっている。館内パトロールが、神聖な図書館を汚す者をつまみ出さんとして、目を光らせてるわけだ。米国の学生にとって、図書館が気楽に立ち寄れる場所ゆえの繁盛ぶりといえよう。

ところで、学生の図書館利用目的の一つは、文献収集である。使用した資料の良し悪し、適・不適がそのレポートの評価を左右する。Aを取るには、ほう大な量の文献から、たった一行の批評をも見つけ出せる技術が必要となる。大学では、一年時の作文の授業を通じ、その訓練を行う。教科書には、分類カードの見方から、メモの取り方まで細かく説明され、こうしめくくってある。“Feel free to ask librarians: they are not so unkind as you think.” 学期末の最終レポート提出の頃には、リファレンスやマイクロフィルム等の施設の利用法が身につけているはずだ。

アメリカの学生は図書館通いが習慣となっている。彼らがよく利用するから、図書館側も利用時間を延長し、ひとり100冊2週間まで貸し出す。ここには図書館と利用者の健全な相互関係がある。静大に欠けているものがあるとすれば、まさにこれであろう。図書館の発達・改善につながる学生の積極的態度こそ、今必要とされているのではないだろうか。（人文学部・人文学科4年）

私の図書館利用

大橋章博

私の図書館の利用法は少し変わっている。図書館へは比較的足を運んでいるが、恥ずかしいことに一度も本を借りたことがない。もっぱら文献収集の手段としてのみの利用である。

私はハムシ(Chrysomelidae)という体長数ミリの昆虫を研究(?)しているが、種(Species)の分類を行う時、文献の収集が非常に重要となる。しかしそうした文献は学術雑誌であることがほとんどで、しかもそれらは最近のものに限られず百年以上古いものまであり、現在入手することはほとんど不可能である。こうした文献の入手に図書館を利用するわけだが、一般に文献へのアプローチは、学会誌を読むことはもちろんとして、1つの論文から芋づる式に引用文献を調べることが有効である。また、その分野の研究者が所属する機関(例えば大学)の紀要や研究報告に目を通してみるのも1つの手であろう。ただ私の場合、日本産ハムシの研究が海外の研究者によってはじまったこともあって、文献が学内で揃うことはむしろ少ない。こうした時、他の大学との相互貸借、複写サービスは便利だ。コピー機械が普及していなかった頃には、カメラ片手にコネや紹介状を頼りに研究者詣でをしたそうだが、そのことを思うと静岡に居ながら国内外の文献を入手できるのだから、誠にありがたい制度である。図書館を広い勉強部屋程度にしか利用しない人が多いが、もっと積極的な利用をしてみたいかであろう。

昆虫の分布や生態の研究は、日本ではアマチュアの研究者に依存するところが大きく、各地の昆虫同好会誌は貴重な資料になることが多い。これらの同好会誌を集めていて気付いたのだが、意外にもその地元の大学が所蔵していないことが多い。本学もその例外ではない。郷土資料の収集は、地方大学の図書館の特色の一つである、と思うのだが……。

ところで、目録というものは文献を検索する上で非常に重要であるが、本学雑誌目録は和・欧文共に10年余改版されておらず大変不便である。少なくとも新規購入・購入打切り雑誌がわかるよう数年毎に目録の補遺版を作っていただけるとありがたいのだが……。 (農学部・林学科3年)

■図書館委員会報告

昭和59年度 第2回 S 59.12.24

議事

- 1 昭和60年度指定図書実施方針について、審議し、原案どおり承認した。
- 2 昭和59年度外国雑誌購入費の配分について、審議し、原案どおり承認した。
- 3 昭和59年度学生用図書購入費の配分について審議し、原案どおり承認した。
- 4 昭和60年度大型コレクション収集計画について、2月末迄に各部局から提出願ひ、要求分についての調整を3月に行う手はずとし、準備願うこととした。
- 5 その他
 - (1) 全国的な学術情報システム関係の動向についての概況説明及び図書館業務電算化委員会作業部会の状況について報告があった。
 - (2) 昭和58年度に施工した本館耐震補強工事により拡張した書庫に、書架が設置され、約21万4千冊の蔵書収容スペースが確保できる旨、報告があった。

お知らせ(本館)

◎春期休業中の長期貸出

貸出冊数：5冊

貸出開始：昭和60年2月15日から

返却期限：昭和60年4月20日

なお、卒業見込者及び工学部3年進級見込者には長期貸出はいたしません。

◎臨時休館

昭和60年3月22日(金)～3月30日(土)

◎開館時間の変更

4月1日(月)から10日(水)までの間は、平日は午後5時、土曜日は正午で閉館いたします。

■教職員著作寄贈図書

外山知徳(教育学部)

『現代のエスプリ No.210 子ども部屋』外山知徳編集・解説 至文堂 1984 (雑誌Z-G)

土 隆一(理学部)

Pacific neogene datum planes, ed. by Nobuo Ikebe and Ryuichi Tsuchi. Univ. of Tokyo Press, 1984. (456.75/P12)

Neogene of Japan, by Ryuichi Tsuchi. IGCP-114 National Working Group of Japan, 1981. (456.75/N65)